

## 減損会計及び時価評価の適用に関する私見

2003・5・9

野村総合研究所 資本市場研究室長  
東京大学客員助教授、早稲田大学客員助教授 大崎 貞和

### 1. 会計基準は何のためにあるのか

- 少なくとも公開会社のための会計基準は、投資家に個別企業の財務実態を正確に知らせ、投資判断に資するためにある。
- ルール通りに処理すると企業業績が悪く見えるので、会計基準を変更して業績を良く見せようとするのは、投資家を欺く行為である。
- 本来、会計基準の選択は、企業の実態を正確に把握できるかどうかという観点のみからなされるべきである。インフレ、デフレ、好況、不況といったその時々々の経済環境に応じて、「妥当な会計基準」が変化するというようなことは考えられない。
- 会計処理を変更しても企業の実態は変わらない。悪い実態を覆い隠すような処理を行えば、経営者自身が、企業実態を錯覚し、経営判断を誤る恐れすらある。

### 2. 会計基準を一時的に変更することの不当性

- 会計基準は、他社との横比較、過去との比較が容易になるよう設定すべきである。朝令暮改や安易な選択制、特定業種の適用除外といった考え方は適切でない。
- 個人的には、「時価会計」が「正しい」という非常に強い確信を抱いているわけではない。この点については、今後、更に議論が深められても構わないと思う。しかし、会計専門家による長期にわたる議論の末に採用すると決定した基準を軽々に変更したり棚上げしたりするのは、会計基準の作成プロセスそのものが疑問にさらされる。
- 会計基準の場当たりの、恣意的な変更は、国際的な信用を毀損する云々といった指摘もあるが、それ以上に、そもそも日本国内の投資家を欺き、市場に対する信頼を損ねる行為であるという点を強調したい。

### 3. 時価会計が資産売却を加速化するとの見方について

- 有価証券や土地といった資産を売却すべきかどうかは、それらの資産がどのような会計処理を受けるかではなく、それらの資産を保有し続けることが企業価値の長期的な向上につながるかどうかという観点から、経営者が判断すべき問題である。
- 減損処理や強制評価減が行われるか否かにかかわらず、真に経営上必要な資産は保有すべきであり、経営上必要でない資産は保有すべきでない。
- 仮に、減損処理や強制評価減を強いられないからという理由で、真に経営上必要でない資産を漫然と保有し続けるのであれば、それは経営者の怠慢であろう。また、減損処理や強制評価減によって一時的に企業収益が悪化するというだけの理由で、経営上必要な資産をみだりに売却するのであれば、それも同じように、健全な経営判断を放棄するものとして批判されるべきであろう。

### 4. 緊急時の経済政策として会計基準の見直しが正当化されるかどうかについて

- 日本経済の現状に何ら問題がないなどと主張するつもりはない。株式市場は経済の鏡であり、株価の下落が、日本企業の現状に関して警告を発していることは疑いない。
- しかし、株式市場の発する警告への正しい対処法は、警告音を聞こえにくくしようとしたり、警報装置のスイッチを切ったりすることではない。警告が指摘している問題、つまり経済そのものの厳しい状況を打破するための方策を検討することである。

### 5. 英国 FSA による「株価対策」措置について

- 一部では、英国でも金融サービス庁(FSA)が、生命保険会社の株式売却を抑制する「株価対策」を実施したとの見方がなされており、わが国もその例に学ぶべきとする論者もいるが、この見解は、事実関係の誤認に基づいている。
- FSA は、生命保険会社の健全性基準として、フリー・アセット・レシオ(資産から負債を差し引いて算出されるフリー・アセットの負債に対する比率)を4%以上に維持することを求めている。現状では、このフリー・アセット・レシオの算定に際し、契約時点で確定している最低保証配当の将来負担とアクチュアリーが裁量的に上乘せする

「ブルーデント・マージン」を合わせたものが負債とされている。

- FSA は、この算定方法は不適切であり、現状では、負債が過大に計上されている可能性もあるとして 2004 年から「リアリスティック・アプローチ」へ移行する方針を表明している。新方式では、生命保険会社が、将来支払うことを予想する配当の現在価値が負債に算入されることになる。
- FSA は、一部の生命保険会社が、現行基準でのフリー・アセット・レシオ引き上げを図るために株式売却を加速化させたのを受け、新方式でみた場合に健全な状態にあれば、現行基準でのフリー・アセット・レシオが 4%を割り込んでも構わないとした。つまり、この措置は、時価会計を一時凍結するといった、ルールの一貫性を損なうような一時的変更ではなく、予定されていたルール変更を前倒ししたものに過ぎない。